

建築専門誌における記事の構成と内容からみる戦後日本の建築ジャーナリズムの変遷 A Study on Compositions of the Architectural Specialist Journals in Japan after World War II

奥山研究室 13M17256 橋本 かをり (HASHIMOTO, Kaori)

1. 序

建築専門誌はこれまで多くの建築の専門家にとって、建築作品及び論説の主要な発表媒体であるとともに、時代を反映した情報を得られる場として建築界に寄与してきた。しかしインターネットメディアの発達に伴い、情報を入手及び発信することが容易になり、建築ジャーナリズム¹⁾の在り方が多様化した今日において、建築専門誌の存在意義が問われているといえる。こうした状況において、建築専門誌に掲載された記事の変遷を時代背景とともに相対的に位置づけることは、建築ジャーナリズムの普遍的役割及び今後の在り方についての展望を得る上で重要と考えられる。そこで本研究では主要な建築専門誌数誌を資料として取り上げ²⁾、そこでの記事の構成と内容を検討することで戦後日本の建築ジャーナリズムの変遷を明らかにすることを目的とする。

2. 雑誌を構成する記事

建築専門誌は図1の分析例の目次にあるように、巻頭論文、特集、作品といった様々な記事により構成されている。こうした記事の種類を整理した(表1)。図面、写真、

解説文によって最新の建築作品を発表する〔新作発表記事〕や、建築界の最新の情報を伝える〔ニュース〕などの毎号各誌に共通してみられる記事を〔定型記事〕と定義し、専門家の持論・自説を発表する〔解説〕、読者からの寄稿文を掲載する〔投稿〕、建築作品を特定の地域や時代、建築家といったテーマに沿って紹介する〔作品事例紹介〕などの、雑誌ごとに掲載の傾向が異なる記事を〔企画記事〕と定義した。さらに〔企画記事〕については、複数の記事によって構成される特集形式と、単一の記事で構成される単独形式に大別した。

3. [企画記事]の各誌比較

本章では各誌の特色が表れる〔企画記事〕に着目し、その内容と記事の構成を検討したうえで、それぞれ雑誌ごとに比較を行う。

3-1. [企画記事]の内容 [企画記事]の内容は、建築デザインについての論説である意匠固有分野(以下、「固有分野」と建築デザインに関連する幅広い内容を扱う意匠関連分野(以下、「関連分野」)に大別した(表2)。「固有分野」に属する内容では、建築や都市のデザイン理論

図1 分析例

表1 記事の種類

各誌に共通	各誌の特色を示す	企画記事
〔定型記事〕	〔解説〕	〔企画記事〕
〔ニュース〕	〔解説・一般〕	〔新作発表記事〕
〔資料〕	〔解説・一般〕	〔図面や写真、解説文による最新の建築作品紹介〕
〔書籍紹介〕	〔解説・一般〕	〔ニュース〕
〔編集記〕	〔解説・一般〕	〔建築に関する最新の情報や出来事の記事〕
	〔解説・一般〕	〔設計者紹介や詳細図、年表など〕
	〔解説・一般〕	〔書評および新刊紹介〕
	〔解説・一般〕	〔編集後記、編集部からの告知〕
	〔解説・一般〕	〔解説・一般〕
	〔解説・一般〕	〔現代建築様式論〕(川添登)/kc6501
	〔解説・一般〕	〔文章を中心とした記事〕
	〔解説・一般〕	〔私の建築印象〕(執筆者多数)/sk8301~8603
	〔解説・一般〕	〔SD7 ライック とらわれた光・窓〕(奈良原一高)/sd6601
	〔解説・一般〕	〔写真や図、資料を中心とした記事〕
	〔解説・一般〕	〔地球の細道〕(安西水丸)/qa9901~1403
	〔解説・一般〕	〔海外ネットワーク〕(田辺貞人)/kk6101~6103
	〔解説・一般〕	〔最近の個展から - 日本の遠近〕(坂崎乙郎)/sd7001
	〔解説・一般〕	〔ルポルタージュや活動報告〕
	〔解説・一般〕	〔月評〕(各執筆者が約1年作品評を担当)/sk7101~現在
	〔解説・一般〕	〔他誌内容を再編又は参照した記事〕
	〔解説・一般〕	〔メディア・レビュー〕(竹山聖)/tj8601~8611
	〔解説・一般〕	〔解説・取材〕
	〔解説・一般〕	〔PLOT〕(設計プロセス取材)/ga0501~1409
	〔解説・一般〕	〔座談会やインタビュー、アンケート〕
	〔解説・一般〕	〔新たな地平のかたり'90年代へ〕(座談会)/kb8901
	〔解説・一般〕	〔報道企画〕
	〔解説・一般〕	〔異形の建築〕(編集部による建築紹介)/kc7305~7407
	〔解説・一般〕	〔編集部独自に調査・執筆した記事〕
	〔解説・一般〕	〔横顔(登壇した建築家をピックアップ)/tj7709~8309
	〔解説・一般〕	〔投稿〕
	〔解説・一般〕	〔「コミュニティボリス」/tj6907~7307
	〔解説・一般〕	〔読者からの投稿を中心とする記事〕
	〔解説・一般〕	〔「アンケート1970」(前年記事についての批評)/sk7101
	〔解説・一般〕	〔作品事例紹介〕
	〔解説・一般〕	〔建築家や場所といったテーマに基づき建築を紹介。〕

表2 [企画記事]の内容

固有分野	関連分野
〔論説 A-1〕	〔技術〕
〔論説 A-2〕	〔社会背景〕
〔論説 B〕	〔海外動向〕
〔技術〕	〔文化〕
〔社会背景〕	〔イベント〕
〔海外動向〕	〔その他〕
〔文化〕	
〔イベント〕	
〔その他〕	

に関する【論説 A-1】、特定の建築家に着目した内容の【論説 A-2】、建築作品について論評する内容を扱う【論説 B】がみられ、「関連分野」に属する内容では、構造や材料といった建築の技術的側面を扱う【技術】、建築業界の動向を社会との関連性に纏わる【社会背景】、芸術や思想とそれらの基盤となる気候や風土などを紹介する【文化】、展覧会や設計競技といった催事に関する【イベント】などがみられた。つぎに [企画記事] の内容を雑誌ごとに比較した (図 2)。各雑誌ごとに単独形式と特集形式の割合を整理したところ、『国際建築』と『都市住宅』を除く 5 誌において、特集形式における「固有分野」への偏りがみられた。これらの雑誌のなかで、「固有分野」への偏りが特に大きかった『SD』および『建築文化』において、特集形式を構成する記事の内容の内訳に着目すると、【論説 A-1】【論説 A-2】【論説 B】の割合がほぼ同程度であった。このことは、これら 2 誌が特集形式をとることによって建築のデザインに対する多角的な視点を与える共通の編集方針を示しているといえる。一方、単独形式の内容に着目すると、「関連分野」の割合が大きい『建築文化』と『都市住宅』において、前者では【技術】が、後者では【社会背景】および【文化】が多いという

傾向がみられ、これら 2 誌は建築に関連する幅広い内容の何を重点的に扱うかにより他誌との差異化を図っていると考えられる。また、『GA JAPAN』と『新建築』においては、特集形式、単独形式ともに「固有分野」における内訳の割合に関して類似性がみられた。

また、[企画記事] が複数号にわたって連載されるか否かに着目し、内容を比較したところ (図 3)、連載されている [企画記事] は「関連分野」の割合が比較的大きい傾向がみられた。さらにその内訳に着目すると【技術】や【海外動向】の占める割合が大きかった。

3-2. 特集形式における記事の構成 特集における記事の構成には各誌の編集の特色が強く表れるといえる。そこで特集形式を、それらを構成する主要な記事である [解説] および [作品事例紹介] に着目し、分類した (図 4)。
[解説] あるいは [作品事例紹介] の一方のみで構成されるものを《解説のみ》《作品事例のみ》に、双方を含むものを《解説+作品事例》に大別した。さらに《解説+作品事例》において [解説] と [作品事例紹介] の数の比から <解説優位> <均衡> <作品事例優位> に分類した。雑誌間で特集形式をもつ記事の構成を比較したところ、《解説のみ》と <作品事例優位> を合わせた [作品

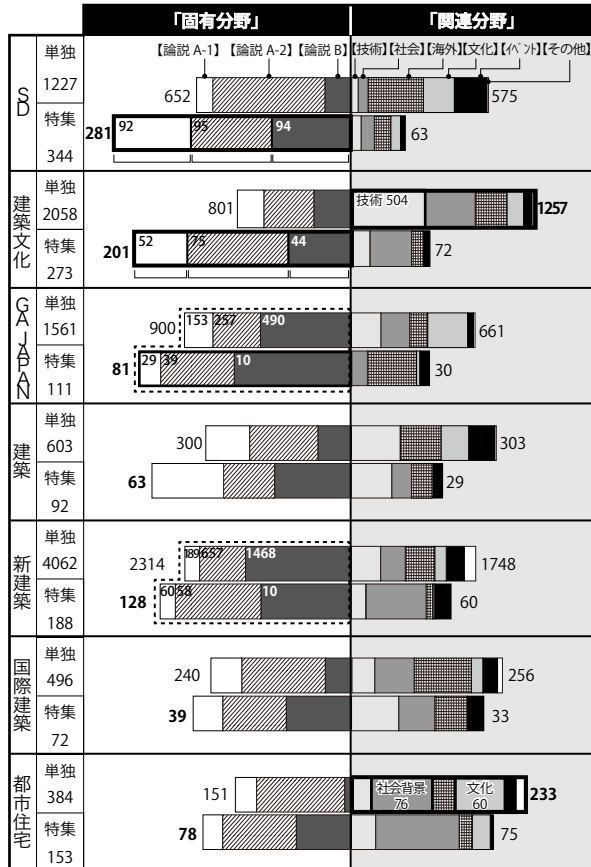


図 2 雑誌毎にみた企画記事の内容

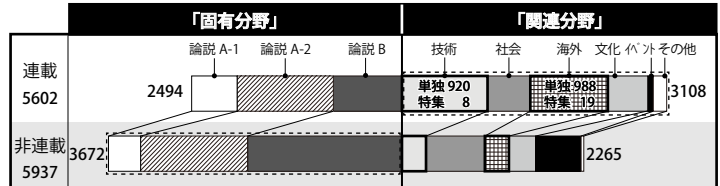


図 3 企画記事における連載の有無と内容の関係

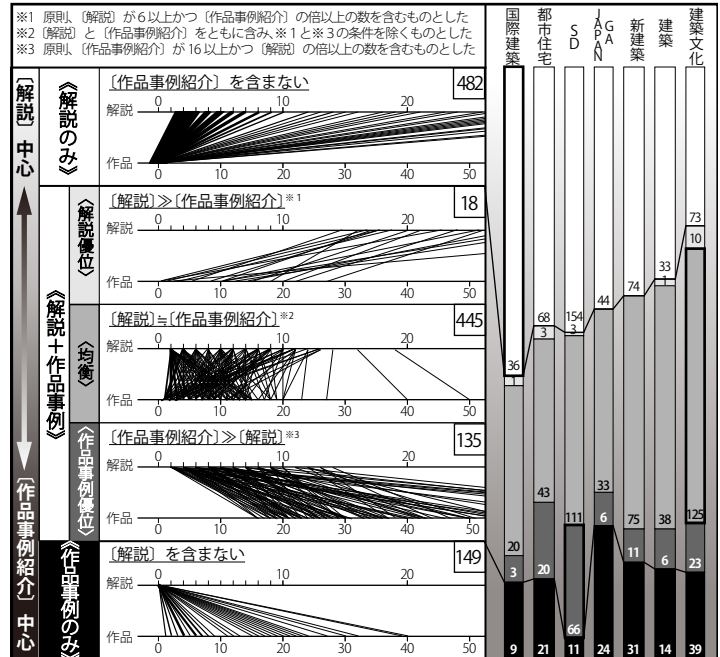


図 4 雑誌毎にみた特集形式をもつ記事の比較

事例紹介)を中心とした構成の特集形式は各誌で同程度の割合でみられたが、『国際建築』では《解説のみ》の割合が割合が高くみられるなど、《解説のみ》と〈均衡〉の割合が各誌の特色として表れているといえる。

4. 戦後日本の建築ジャーナリズムの変遷

4-1. 記事数の推移 まず〔定型記事〕を代表する記事として〔新作発表記事〕に着目し、〔定型記事〕と〔企画記事〕の数の変遷を図5-aに示した。1960年代初頭から1970年代初頭、および1990年代初頭から1990年代半ばにかけて、〔企画記事〕が〔新作発表記事〕に比べ大きく増加しており、これらの時期に数誌の建築専門誌が創刊されていることから、競合する建築専門誌が多いほど、定型的な記事よりも、各誌の特徴となる〔企画記事〕が増加する傾向があるといえる。

4-2. 〔新作発表記事〕と〔企画記事〕の数の推移 つぎに〔新作発表記事〕と〔企画記事〕の数の変遷を図5-b, 図5-cに示し、雑誌ごとと比較した。1970年初頭までは各誌の記事数およびその推移に大きな変化はみられなかったが、その後各誌で異なる推移がみられた。特に今日まで長く継続して刊行されてきた『新建築』に着目すると、この頃から〔新作発表記事〕の数が増加し、他誌に比べ多くの作品を掲載する特徴をもつようになったといえる。また各誌において、廃刊前に〔新作発表記事〕の数が極端に少なくなる特徴的な傾向がみられた。

4-3. 〔企画記事〕の内容の変遷 ここで〔企画記事〕の内容に着目し、その変遷を図5-cに示した。まず、1980年代半ばおよび2000年代半ばから、徐々に「固有分野」への内容の偏りがみられた。また、「固有分野」に着目すると、1970年代初頭に、作品批評・解説である【論説B】の割合が増加し、「固有分野」の半数程度を占めるようになり、2000年代中頃からは大多数を占める傾向がみられる。一方で、「関連分野」における内容の内訳に着目すると、1980年代以降【技術】が減少傾向にある一方で、【イベント】の割合が増加傾向にある。また、2000年代以降【海外動向】に関する記事がほぼみられなくなる傾向がみられた。

4-4. 特集形式をもつ記事の構成の変遷 さらに特集形式をもつ記事の構成の変遷を図5-dに示した。1960年代半ばから1970年代半ばまで《解説のみ》の割合が大きかったが、その後《解説+作品事例》の割合が増加する傾向がみられ、各誌がテキストと作品と織り交ぜた特集によって特色を出すようになったといえる。しかし

2000年以降、《解説のみ》または《作品事例のみ》のいずれかへ偏りがみられ、特集形式をもつ記事が単調化しているといえる。

4-5. 戦後日本の建築ジャーナリズムの変遷 以上の分析を横断的に考察することで、戦後日本の建築ジャーナリズムの通時的変遷を考察する。まず、高度経済成長期を背景に多くの建築専門誌が創刊した1960年代において、各誌が建築家の論説を中心とした特集を掲載する傾向にあり、建築専門誌が論壇としての役割を強めたといえる。1970年代に入ると、雑誌ごとの〔定型記事〕や〔企画記事〕の数の推移に特徴がみられるようになるとともに、特集形式の記事の構成の仕方などに表れているように、建築ジャーナリズム全体で記事の在り方が多様化したといえる。こうした状況が継続する中で、1980年代後半から2000年頃にかけて、建築専門誌の数の安定やポストモダニズムといった思潮運動を背景に、作品を中心とする特集の増加や、建築を含む美術系展覧会レポートなどの時代性を反映した記事が増加した。2000年代以降は、競合する建築専門誌の数が減ったことやインターネットの普及による情報入手・発信の容易化を背景に、記事数の減少や記事内容の作品論への偏りがみられるようになった。

5. 結 以上、本研究では、建築専門誌における記事の内容及び構成を整理し、それらを雑誌ごとに通時的に比較することで、戦後日本の建築ジャーナリズムの変遷について検討した。その結果、論説が専門誌の重要な記事となった1960年代、各誌が特色ある記事の内容や構成を模索した1970年代、建築専門誌における報道的な役割が強まった1980～90年代を経て、記事の内容や構成が定型化した2000年以降から現在に至るジャーナリズムの変遷を、時代背景および建築専門誌の創廃刊に伴う各誌の変化の総体として明らかにするとともに、専門誌の数が減ったいま、メディアのジャンルを越えて雑誌の特徴を相対的に位置づける視点が建築ジャーナリズムの活性化に必要な展望を得た。

註) 1) 本研究における建築ジャーナリズムとは、専門誌・新聞・インターネットなどのメディアを介した建築に関する情報を伝達する活動を指す。

2) 建築作品の発表を前提とした7誌を資料とした(付表)。

参考文献

1) 宮内寿久; 建築ジャーナリズム無頼, 中央公論新社, 2007年

2) 近藤正一ほか; 戦前から戦後の建築雑誌に現れた建築思潮, 日本建築学会学術講演梗概集, F-2, 1997年

付表: 資料とした建築専門誌のリスト

記号	専門誌名	出版社	発行期間	分析対象(原則奇数月)	冊数
sk	新建築	新建築社	1925.05~	1950.01~2014.11	390
kb	建築文化	彰国社	1946.04~2004.12	1950.01~2004.11	330
kk	国際建築	国際建築協会	1950.07~1967.06	1951.01~1966.11	96
kc	建築	中外出版	1960.01~1975.06	1960.01~1974.11	90
sd	SD	鹿島出版会	1965.01~2000.12	1965.01~2000.11	216
ti	都市住宅	鹿島出版会	1968.04~1986.12	1969.01~1986.11	108
ga	GA JAPAN	A.D.A. EDITA Tokyo	1992.10~	1993.01~2014.11	132

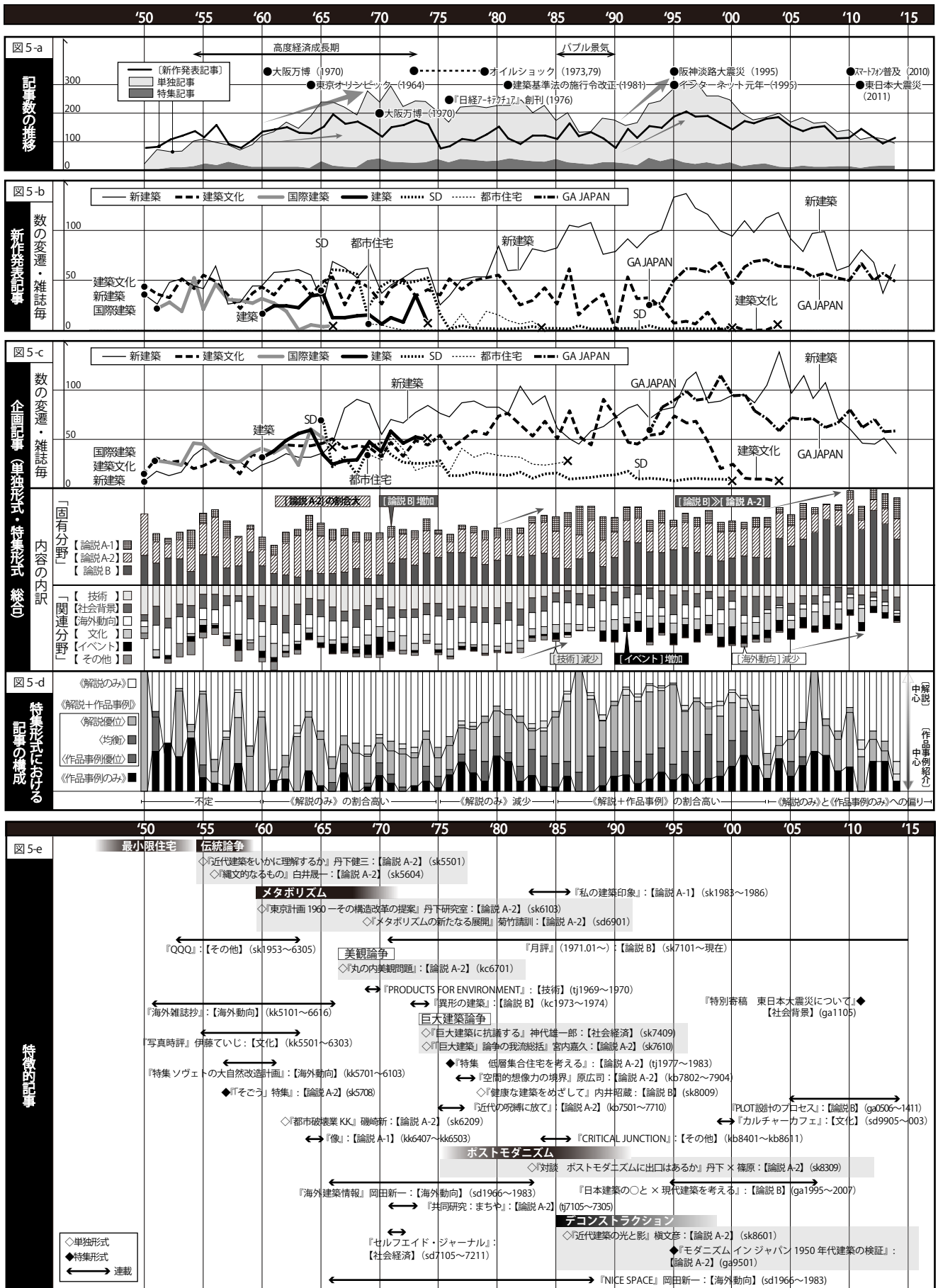


図5 戦後日本の建築ジャーナリズムの変遷